中稽入

一盃奇言

式亭三馬作
歌川豊國画

上

遺3
812
1

十返舍一九著作目録

- 滑稽道中膝栗毛　東海道　十八冊　本朝道中　二十五冊　奥羽道中　十五冊
- 滑稽二日酔　蔦師前小商老人画　全二冊
- 滑稽六あみだ詣　初篇　二篇　三篇　各二冊ツヽ
- 滑稽東海道　全三冊

門へ 13

附言

滑稽道中膝栗毛とて板元が親類の石命板ぶ元庫の栗虫たちんとを或人が見て頻に頭痛に脳て磨滅を補ひ世に出せと侵せども板元痴金魂の大いに不義義粗も如何あるべきもおもしろく見に力を得て漸日漸く再業言を四方に告しに幸に明治の聖世の腹鼓碎も不碎も雅俗を問ず宜しく家業の暇に之を見ゆへ脆弱絶倒胸膈も自然と裂きて長病息災百薬手の内寿命も元と結合ふ板元の甚効能もなりしめや世程より四方のら の作者文遠里住客い郵書を飛ばし陸続購求て止ざれい彼頭痛ふ脳し世活好ぶ。喧吉敲の懶吹者つて板元

逸門 812 号 巻

めつけの幸ひ然るに近日又此書を板葦或い表師を頼め
費賣せる者甚だ多けれども皆不全板元是を何童の
屁ちまとも思い老看者も亦評して曰草双紙い所為ふ
賤しく活版い新向を考ふと友て板元が元板の賣裁殘
塔先しい唱呼亦仰くら急ぎ心と小言も言い看客諸君
の愛顧を願まきと僅で愛に出穢と申上ル為めふ板元もお
しく布盛を覚ゆ出で粗まず怨の皮を突張十返舎翁の著
書い固より近世有名ある式亭三馬山東京傳等の著書を
初め板元が必義の珍書数百卷悉面白より漸次出版せんと
願ふ冀くば卷末の目録を出笑覧の上出求めらんことを

明治十五年
壬午仲秋　　珍々堂滑稽書屋　江島伊兵衛

一盃綺言自序

酒もまの味ふ酒ハ味ふ
づあるの声ハ高ふ
たるの酒ハ好めば酒
あるとこ酒ハ
字ちく生醉言質。七ハ醉上ハ。
酒くハ酒醉を
本屋ハ余丹坊。酒のあとを

坪田蔵書
氏寄贈

さてさてもはれがましく
もつぱらみもくと
もつぱへば書てふ人心をもつて法ぜんで出
てふ冊。はつけて一盃綺言をもつらふ

本町延壽丹好あるべし

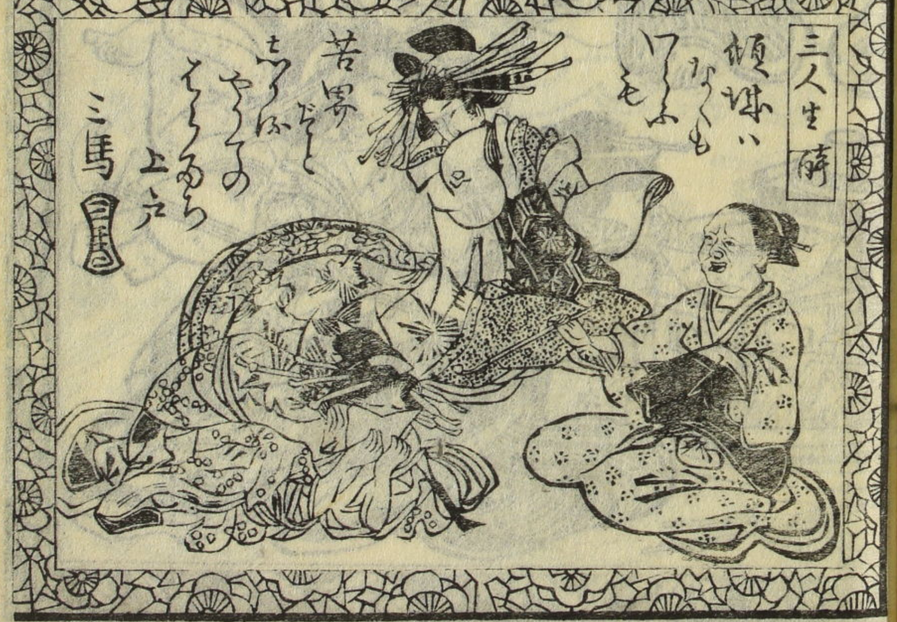
式亭三馬醉出

我獨さめてはなんの為ぞ
こゝか醉ふ酒を聖あるべし

一盃綺言標目

○まるくなる気きのそう　酒癖
○盃のとりかへもうつうき　酒癖
○醉うて吐ゆそ悪癖なりふ　酒癖
○陽く氣のつよ癖　酒癖
○あるでことをくどくふ　酒癖
○つまらぬこゝろもち　酒癖
○ひとり酌りろくなる　酒癖
○無盃のるをあるそふ　酒癖

通計八種



色
我も又
玉の宮
上戸
三馬

つるはと吐てうれしーぐらも
酒樽の中へ引あげ〳〵ゆうする
大坂を年いわ十の内そとうんも
酒くさくてたまらぬもちも
ゆうねとゆうありさあ
玄関より入来る
大音あて
只今還幸ハッハ・ト
大きなる声でミッ笑つて
けろ〳〵とまじめふる
くせあり
▲ヲヤ先生只今
おうへりろヱ・■ヨウト
あきれたうわとしてヤこれい
のつけふるまねとして
大酒癖
肉君イヤあざや
うるさ・ヤどうも
うるさ・どうも
うるさ・トいふくちぐせあり
所
偖小沈家で猶柔
さるとこれい沈東蓋
厭閉月羞花・とも偖つ
べき振ひぢや丈ぢあふ
ようてうのをんが明友の

文さにそもくぢやテ。まづ何処へ行ぬうといふことさ
ふ。ついぞ聞うとそうさためしぐうへ▲うそだろう
りや。●何虚誕といふうぞ。こゝの主人い内君だろ
そかういうてゐる内。大の村学究ぢや。イヤスこゝ
の洗魚落雁どのも▲ゐんでございまそナ。金魚ぐ落
丁とたべるの。西瓜とうべるのといやよ。●いやよ。ふう。
洗魚落丁閉月羞花とハ。内君の美貌をイヤうつくしい
ふとゐめうさのぢや。▲アレまさあんなことを。●何あんな
と。そんなうべチト亭主と手だるーしてうさぐよい。け

内君い嵐と胴て敵し胴ふいまるゲ。亭主とべうへ
つて結へいまておく。そのやうな又しうさうぐこと
にあるものろ。トキニ主人外出ろ▲ハイちよつと近所
まで。●フム。留守るのぶよい。わりふさるうるくこてや
らう。儒者ぶの学者ぶのといふものい髭とぶりと
そやして。色と書くして内ふぢうり居るものろい
ちうねが。こゝの主人も若こむさい男。あまい何ろ。
煙草盆の外い湯ふ入さこいあるまいの▲よいのさうる
くてもようぐざいまそきういおせいさ。●イヤサ内

君の目うらい源之助。所謂伊ろ。松八などのごぐひ
ともえんゆるであらうぐ。けう方の隆宣でいめ〳〵れ
の八助と伯仲のあひぐぢや▲源之助松八ッサ・ヲホこ、
こや。あまぢやナ。大碎さんいきうも志紀へで役者
のゆとおつしゆる。源之助い宗十郎ふうまる。「松
八とい松助でぐざいまま。●伊とけ。おこなどぐ口
と出しおつて。そのひまふ菜でもいつぢくこそれ。
コレ内君いあるぐけるいらぐあひてゆいるね。伊さ
りのい吏婦ぢや。浜ふうとも気をきろせて。おまぐ

来さぐ費差でもあろけろ。ちろし。イヤ〳〵まぐ菓喪
そゆい。トあうとイヤコレ。内君。先刻うろえうけるふが豆
下い猪蛋てあるのしそあさるが。不後笥ふも一桃吃
しろとろゆんとろ伊きがありさうゆりのぢやの。
個しその酒がをしいう▲をしくいぐぐいませんが
ちまへさんいよろぢと碎ておいでゆさるうぐサ。
●何碎ふりのろ。一向ちろ物ぢや引そぐろうり。そ
ま志ぐお碎ゆまろて。●又おこめが何をちつて。浜
笥が因のちよふふでいゆい。サア〳〵内君お蛋いどう

ぢやね。チト西蛮と頂戴と仕りまい▲イヽエあげませ
んさくしどもの者のまとるくあつまあつさか
らあげません●コレハめいさく。あらうらべ好男子。まじ
まの好男子ぢや▲吾でございまそ。そんな懶
婦のやうな名をつけて●あまい幸頼ぢや。是下
い学者の女房のやうなもの。さてくまと解せぬ
婦人ぢや▲そんならなんでございまそ●好男子
といろ男のことぢや▲うそぢつたり●アレ。実説と
云てもうそぢといふらぢうもならぬ。どうも

ならぬ。ハツハヽ。「西新」きさんエ。そんなら好男子とい
ろ男の表徳でございませう▲ヲヤくことしくことを
ば。表徳といふ徳既ちのことぢやそれこそ幸弘
ちでござい。まあ。表徳の好男子い●なんで乳がそれ
ととういねべならぬ。ハツハヽトミツつくろつてけろヲヤそまでも
おまへさん●アくやうまい。そのやうな物がごぐら
うつてい。どうもならぬ。どうもならぬト西とひつくろう
●あるを寄絶く。けのどと通る内とつふものが天の
美孫ぢや▲チトいろぢきませう●まづ代方へさしも

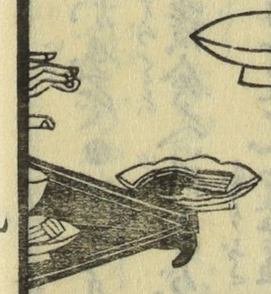
せんで。今のんざのい豆ト下の盃ぢや。芝ろう張めて
いろ〳〵ぐちや。ヲト〳〵落ろく。夢いよごしても此方
の国らぬるぢやが。衣張をけがしものとおそまるぢ
や。ア、おまへ酒。これい伽ぶぞろう到来の酒であら
う。こゝのをんなが買ておく風でおい▲イヽエ買ました。
おまへさん。岳猴でもおんでもおいネ。買こゝ。ヤ買こ
酒でいのまをぬ。一合十六文位の酒を。二合ろ入合
買人のぢやろうもねふつろつる。ペット。はべをまろ▲おく
いのう。ついで可愛がらまるのるへ男ぢやて。トキニ

お着い。ハヽアト酒物をうらべろ〳〵。絡の具四ゲちびし
ろぶ〳〵おろんざれと。此画舟も大先生いつえぬ
つい〳〵ふおんぢや。ちろうろまこ納豆。エヽト。中の町
うろまこ甘露梅ト。そまろうろ生たまこ。鰤の麹づけ。
色いおのく意又着ふ到来物と。内君あこじけるの
うろふかぢつておのるのうト。此鶴いトふことハヽア菜
時う。此時い社中うろ到来。此菜いちこゲ着ろう到
来。こゝふかぢけてゐる昆布巻い。出入の家ちろう到
来全体まづふ地面の一ケ所も持てゐるとい伽者う

どこふあるものゝ。そのやうな不經濟なこといけ方の夜にあいてをだや。それいるいう。新ゑさふでと。トぎろ〳〵まづ不審紙をつけるものい甘露梅だやて。ゐぐめん主人奈何そ町の茶亭ふ加已のあるたべがゐい。梅しゆじんなぜるに他ふへ到来の不を又引ふ引さものであらう。扨とトぎろ〳〵ゑそゐる▲よくゝろくちをおつ志ゆるネエ●扨まづ。新ゑさふが。通什衣種の者ゞ。一ふも紙の出さものゞゐるゝの。美白老人。孔方兄を労せぞして。到来ものでゆてゐたといふい。ろゐへゞ不敢だや。ゲイ丹。トおくび

▲そを出徒ゞまし。そをゐゞ砕てお出で●何こをいい他ふでのんゞ酒だや。ろふい奥方ゞ費金へ行さゞ。ろくゐものい食せをゐね。者も一ゆれと云えて。取蓋ゐど也。一昨年あゐり煮さ煮姑ゞ。沢山元とゝて平角出ス。豆腐を七歩ゐど割さ雑卵焼ふ。干鱈さゝみゐどで。トにも合いをるものでいゐい。酒ゐども地花ゞゐろ。魚酒ふ出祝と出ゐをゐもゐ。後をさんゞに仕拵ふさ。宵て平の切身ゐどもいゝゐゞぞあらうと云ゐさゐ。服いくゐゞふ来さゞ。奥富ゆゐいやつゞて。お迚もあの後み

とと揃つて。孝父二トわどの玄関とやらさげ。先見明の物ぢやてな。▲孝父二トとゝあんまりでございやすとネ●何うまふことう。どうで面くいの出る物ぢやくらけ方屈ともおりいぬ。トいひあがろ紙入をヲ、こゝ出〳〵落れげある。イヤこれハ助。浜今うら行て版と食て来ぬか。奥方ふおりふさ面接とうけてやりない。コリヤ〳〵おこ。モット酒をつげぬか。内若のうちとこるふおよぢぬ。上とまるぶりで。浜までげあるでげ



盃のとり
やりにもづ
ひい酒癖

因ぶんいつてどうちり
くらつて男あまと
つくへくくざをゝとり
くとやりあげく。でござり
まそうナ。まろ〳〵けひやう
づたいめちあげつさう。どうう。
お見いつません。まづこ面ハ
ひとつお押へトませう。イヤ〳〵。

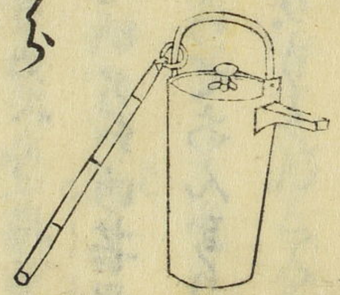
でもござりませうあなたども。コ。コ。けお盃い。千兵衛
さんのお兵衛く。酒を勧め千兵衛さんの御兵衛
ごア。ツ。ハ。ハ。まづく。夫いお押へく。イヤサく。ハテお
あるもござんすませうさ。コレくお約く。ヲットく。こな
うらあるん。あるん佐りませ。その手いたべぬ。お一ツサく。
ひよ平べ大二座ゆあ魚ふうら　ヤ又お盃。ヤこないくありがとう
又二ツさうびきささな
ヤ。ト。ありがとういあなたがこうあなたども。一体けお盃い
まづどういたしさお盃ごみ。ヘヱ。でござりませうみ。
夫いあるわどおのひざーありがとう。あなたども。檜

兵衛おがあがつて。そなたらぶ又四郎様がめちあがつて。三郎兵衛様うらあなさへ。どつてお盃あらう。や
ちうお源ふ。どうさうあるものでござりません。おのひ
ざーとおんなしにあづうつうこん。お方。まことにあり
うこい。あなたどもこれいお源おく。イヤく。お源。お源
の通り。千兵衛さんの方うらぶ。今まいりません。お猪
呆でいあけなども。こなたいお順。ハイく。でござりま
せうナ。さあうござうばお手ありとと。ヤ。あるん。ハイく。
でもござりませうぞ。まづく。

酔くるしみて愚痴ぞろいの酒癖

「そぐりのぐらいのめ
ぐらぐ・金体八ぢ清
さんといふくいさう
らねぢろさサ・やせ
てもらぶをても
釈方い釈方ごいサ
ろ〜〜い釈方の

ぐらぐらはいそのつてあねと
とるもうあのぐ・他人ぐくで
酒ぐせりとそるのぐ・人
あいるる我とるときぞぐりそら
せておいて・くんぞんの法指をつける
酒ふいろうてろ〜をちぐしてサ・てんぐぞうを
絶ふふつていそさうもねへめんごとすのう。
あるへの茶ぐられど・マアどうぢひさる・何も八ぢ
清さんぐ金のらぐといつて・文字を練めらうぢや。



ゑし。こんかい合力といふてもらうてゞも移へ。ハテサ。じんぐう
ぢんぐいとん。そんゑさまりしゝふいきだやアごろうま
ねへ。あんのとこゑ。ネエ どう思ひゑさる。そぐろうゑぐ
らあめへの茶ごけまど。今のむ酒ぐ毒とゑれ。とこと
しい祝方のゑぐろうぞこんゑゑ残とりやゝさ。
そりやアをるもいさ。ハテあこうめへぐ。何もめゝひ
こうていふのぢやア移へぐ。ネエ。けるへ古若男ごとう
いつて。翁ゑの一足もくまこうてあんまりぞちも
あこるゑへ。ネエ。あめへの茶ごぐ。めゝひこくいねへい

ゑ。こうれい世の中の義理時機といふのぐ。今こそ去
んゑふびんぐういをるれどこゝもむゝしへお
爲ふぜゑもつゝつこのぐ。あめへの茶ごけまど。
ハテぢいぶんをることも去て通つこぐ。今さらにゑつ
てあの元ふおゝしゝくおりへまてい。チヨツ。そゝも
たくねへゝゝまど。あんまりんよくい移へのさ。それふ
ついちやアゆのゝくアどめも。去ぐつこのめぐつこ
のとこゝぢゝゝ三屋ゝけまど。ハテそゝゝを三ゑッサ。
時代くぐと。おまもむゝしのおれゑゝ。人さゑぐふ

馬鹿あもさうにあるめへぐ。奥ちりや純ちるの程
屋で。今云ことてもとろりられねへちるべぐ。あつはけ
えろサ。おまぐどうちるう。マア若い目でえ牝しろ
といふるサ。一体まさハ台湾さんの内方あども。そ
でねへちうさサ。業者のとりやりも。近年くりまへ
しぐうるいうう。とつつてもいくおぐけまぐ。それも
うつうらぐにあてあまた。めくくつぐ。まづ入すの
そるへふぐまめの一ト袋もつけてよこせべ。こうち
いかすのそるへふ。鮭の一本もやるやうふにやた。

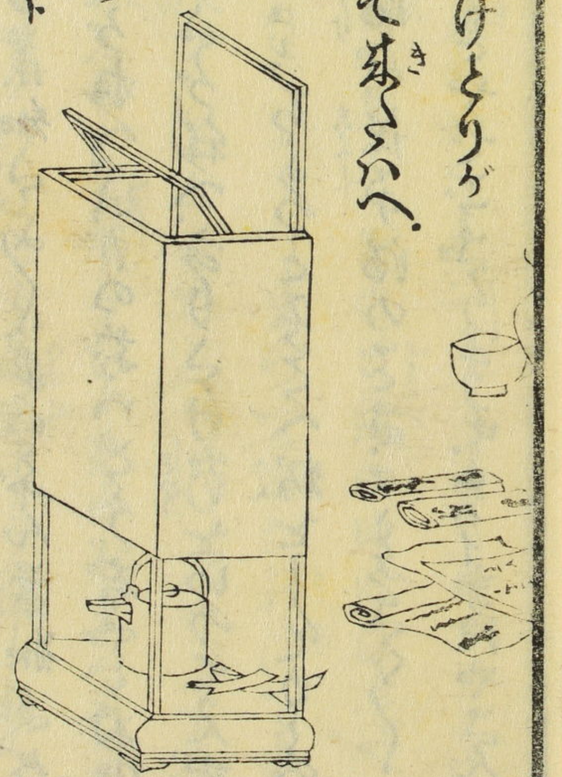
あの元いめめちぐうう。ちつとぐりうえつとも
ねへとぐあつても人ぐいつねへ。ちちしらぐ。今の
分ぢやア。升も掾ぐどめぐうう。そこいやせ
系掾で佐て出ねへきやア。ら稼へ。おめへどうい
ひるさるう。マア理屈ぐさうしちりんぐト引こうけて酒を
ちびりく

酒く氣の佐よくする酒癖

うけとり一人八イ万屋でぐりまた。ホイく万やさんう

後ふまておくんなさいまし〜・まず
あつまりませぬ・ハイく・ト出り
引遠へて
ハイいせやでござり
ました・どうぞ
お拂と・ハイく
いせやさんか・
モちつとるて
まておくんなさい
ハイかしこまりましたト

出り・サアくかけとりが
段くおしよせてまいへ・
エト・ひのづ出
出ーをメて
ヨんやう・万屋が
金毒高こ分ト
大夫・ソコデ・いせやがこあ毒分・米屋が
武高武分・け外ふござ〜が熱メてこあいくらとあ
るざらう・大屋さまもこ月たまる・どうもこあつ〜



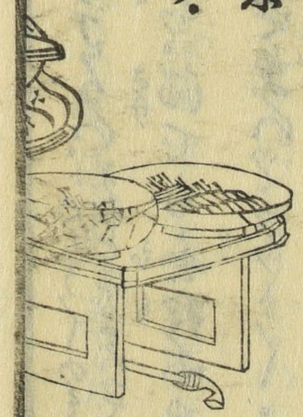
りんぐ。トあまとくんでゐる。そばうり女房 モシエ。せう異後さんの儲もは
あと達排めーておいさらう。今爰いぜひ排てやらぞ
いるまい。そてさらしぐ稽ちりめんのふそそも
うけらい。ネエ●兼紹ぐろ。ぞいぶん兼紹ぐろ
どさうぱり尚ぐねへ。けめの茶いどう考ぐ考のげ
ようチョッ。ちらうぐ稼へ。ありうけ邸といつてえ中。
アくふさぐぐ。コレ。ちまつとそこへ煽をしてめらう。
形いふとまい酒ぐ。徒るゆ酒のとさ。アくふさぐぐ〳〵ト。
いよところへ「ハイ まきやでござりまち。●ハイまれやさんろネ。

モちつとしくまておくまき。「ハイ〳〵ト出り ●サアく酒
く。そやく一盃のまう。その古酒の中いあんぐ。盃
のおかぞう。それでようしく。まづ一盃お神酒とあげ
ようトくふとのんで アいくんのちぐ。トまさちをアくういぞ
く。いつの拘茶あも茶命がちぐまるぞ。あつちもと
つちも不義理ぐふけぐろう。面出しがあらねへ。大
原さるへも何とらいぐいるめへス。アこあいさも
んぐ。トまいつの形ぐふよつてト。まれやぐまくやら
うとありうさうねい。一昨日の晩の刻金ふまれあげ

ら迄ちりとまづこれまあてお陀佛ア、つらいく。実
い結たのさあくげとい
コレかくア どん。雲酒と言うちつと粥としてくぐせん。
ヨヽト。今ちら万石殘くどいて指あだりり引出しくん
ものごが。さうまくいけでいくぶ。せめてあでも
いく。ちつとい肩げぬける。トいふあ「ハイ米屋でござり
まする。ヲイ米屋さんち。粥買つて来あ。てうどいく。
「ハイく。ト出ず。ヲイ粥ぐよからうぜ。ヲット来の家く!
のをアヽこあつくりんご。米屋へもせめて壹合壹分も

やつて迄てへ。あんまり義理ぐこるい。トぐびうくのをて
アヽいくんりちと。酒い慈の玉箒ッ。酒でも壹理ふま
いくらぐこ迄までお命づけ迄まへッ。ヲットく。
かくしく。かくア左衛つの耐。チト迄け種といきぬへ。
いくぜく。こあくも酒でものまつくあい。何も気をく
さくを迄へ。どう迄るりんち。ある時い摂ふス。
あの時ふいちちいぬス。こんあ又あいふちあるも祢
へりんご。拘茶ふくるくむい大ありふなりあくりめ
つぐ。あんのこ迄。どう迄るりんち。トつぢやうんでホウ引。ト
ぐぶと引ちけ

あるなと　素の字く・彩まる酒をのんざ不い掛ぐぜ・
トとろちりのふゲイ引ア、実いく・大丈夫ざ拍子伺・かつ
うるく徳へぞ・掛元屋とも有りいざ・何つがもねく・
ろんのるのぶぶ又・お迷ど屋ともありいねくとうつち
やア・屋とも思いねく・ゲイ引・何屋ともありふものろ・うどいろふ
「ハイ」いせやでございまし・●ヲいせやう・
がうぎとまいぜ・まぶく彩て来
さつー・「ハイ・トふせうぐ出てはり」●ぐらぶうめ・
其ほをくんぐの関扇うッ・何拝ふ



のの う・金体他ふ拍と袋
まとといふぐらぶうぐら
掛元ふふ思りやア
ぐる・おのうアえ
ぶいく・儲る
ざうりで
袋まと
いふこけるるい志徳へうう
取るといふ掛もあ・掛元ふ

あるくとらんやがいしねくごろうくめ。「ハイまたや
でございまた。●ナニまたや。まごくりつとおそく来
さろし。「ハイ。ト出てゆ引ちぐて「ハイ万屋でございまた。●万屋モウト
おそく来さろし。「ハイさやうあらう又一人「米屋でござい
まつた。●ヲツト米やさんろ代方うらうりさせてやらう
「イヱ又まりませう。●何来ぞともいつみ。こちら
うらやるよ「イヱどうせ近所へ序でございまた。●
そんあらう又来てゐさろし「ハイさやうあらう。又一人「ハイ
いせ屋でございまた。●モウちつと後ふ来ゐ。「ハイ書う

おまへさんおが仕舞でございまた。●そんあらこと
ちらやらう「イヱ何今どうぞつうちちつてちさいま。
釈方がさうやまた。あまりあそあいりまらうら代
茶句茶い見張うをつけておくんみさいまト。●稼ぐ。
承知ぐよ。今まぐ食があつまらへ。おつけこちち
うらうらせてやらう。釈方ふさういいつ。拂ふめへと
いやせん。随分拂ふらふあんじみさんみと掃つらう
さうらいつ。「ハイさやうあらごうぞおるのんまた。
ト出てゆ「ハイ万屋でござい。●ヲヤヲウ。「ハイまたやでござい

●ヲヤ〳〵又来さう「ハイ来やでござい」「ごめんなさる者や
でござい」●ヲヤ〳〵来らい〳〵・油を搾る呂り 焼筒の
やうに・ぐう世の目まぐるしく来るせ・サアく〳〵どん
言うな合ぢりのむべい・そべうちさあさうぐ・サアく
な合のうやア・かけとりこわく・居借侍でも立借
侍でも・何でも角でも搾りてこ外大合ぢうひつ
りけべい・ゲイ〳〵フウトおくび

一盃綺言上之巻 終

東京市麻布区鳥居坂町百拾貳番地 博文館蔵